

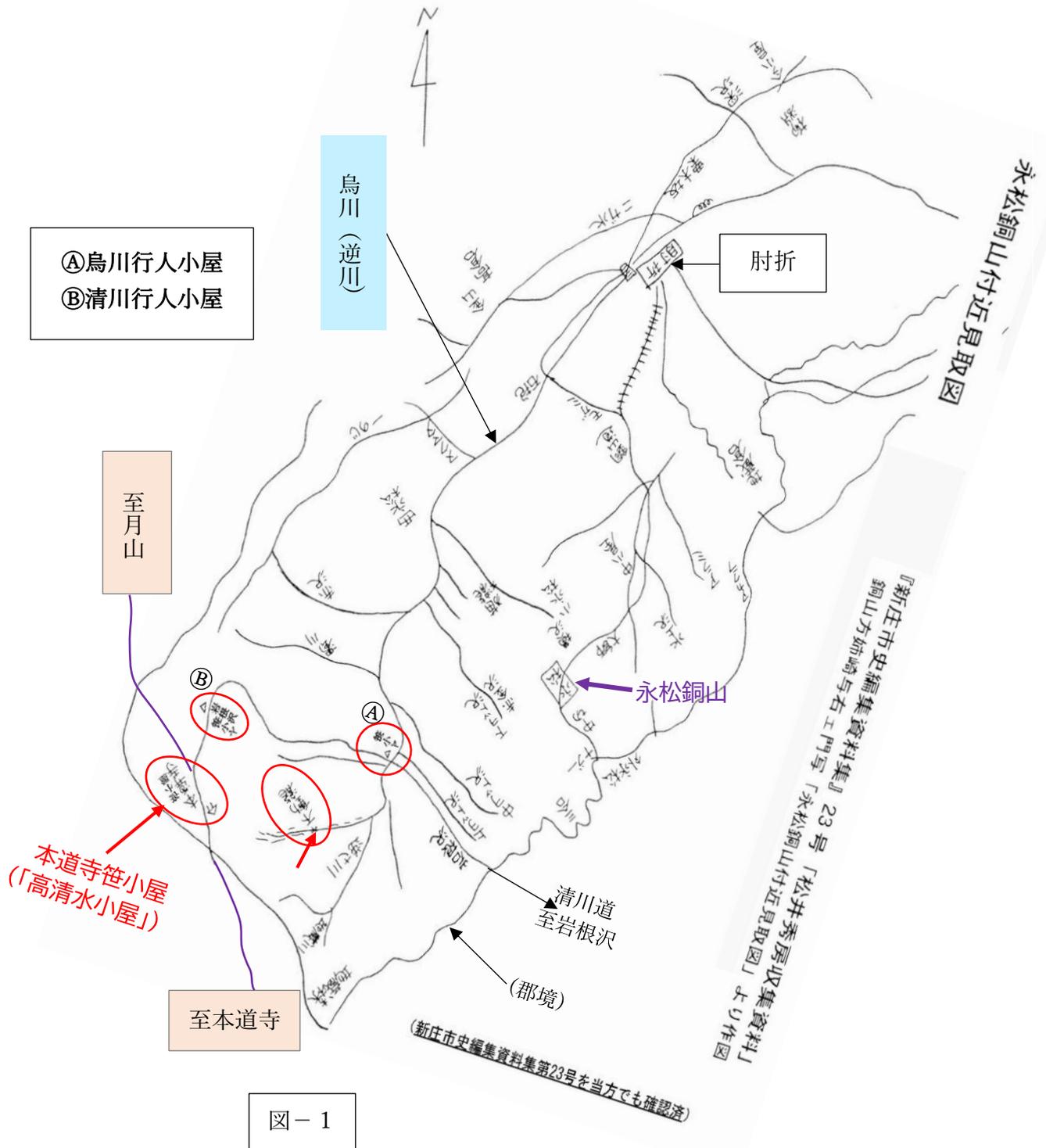
～ 「高・清フレンドリー古道」 ～

第3巻－I部

山師（鉦山師や鉦夫）の熱い視線

1. 烏川流域

図-1は大友義助著「永松物語」から拝借したものの、根拠となっている新庄市史編集資料第23号を確認の上で当方が少し加筆している。これは、新庄領地内永松銅山他烏川流域の鉱山に係る絵図である。作成年代は明記されていないが、内容は江戸期1600年代後半から1700年代前半のここのように読み取れる。このように当該地域は西川町史に記述されている「西川鉱床地帯」の一部でもあり、長年に亘り鉱山開発の動きがあったエリアである。銅山川(上)中流域には慶長十六(1611)年に荒木源内(西川町/白岩領間沢村出)が発見した全国屈指の永松銅山(昭和36・1961年閉山)があった。



ここで格別の留意すべき点があって、一見信仰とは関係ないと思われる鉱山の場所を語る図面において、

- ・無数にあらう滝の中で「不動滝」を明示していること。同滝不動尊（不動明王）を崇め祀っており、同滝・同尊は隣接する最上領地内の岩根沢旧日月寺の「奥の院」（管理下）であることが、古文書記載の訴上（第3巻-IV部-第1章に別記）において江戸幕府寺社奉行から認知されている。なお、点線を加筆しておりゴルジュ（川の両岸が狭く垂直に近い岩壁の迫ったところ）状、あるいは、三条の滝なのだろう。同滝に鉱山の坑口があつと伝えられている。
- ・新庄領内であるものの最上領地内旧本道寺配下の別当（源養坊）管理下の『高清水小屋』、および、岩根沢清川坊別当管理下の「岩根沢笹小屋」（今もある清川行人小屋）や烏川沿い「笹小屋」（今は廃止された烏川行人小屋）が描かれている。

2. 「高清水通り」 界限

次に、図-1に隣接するエリアに係る鉱山開発の動きについて、西川町史に基づき図-2、図(表)-3に抽出した。

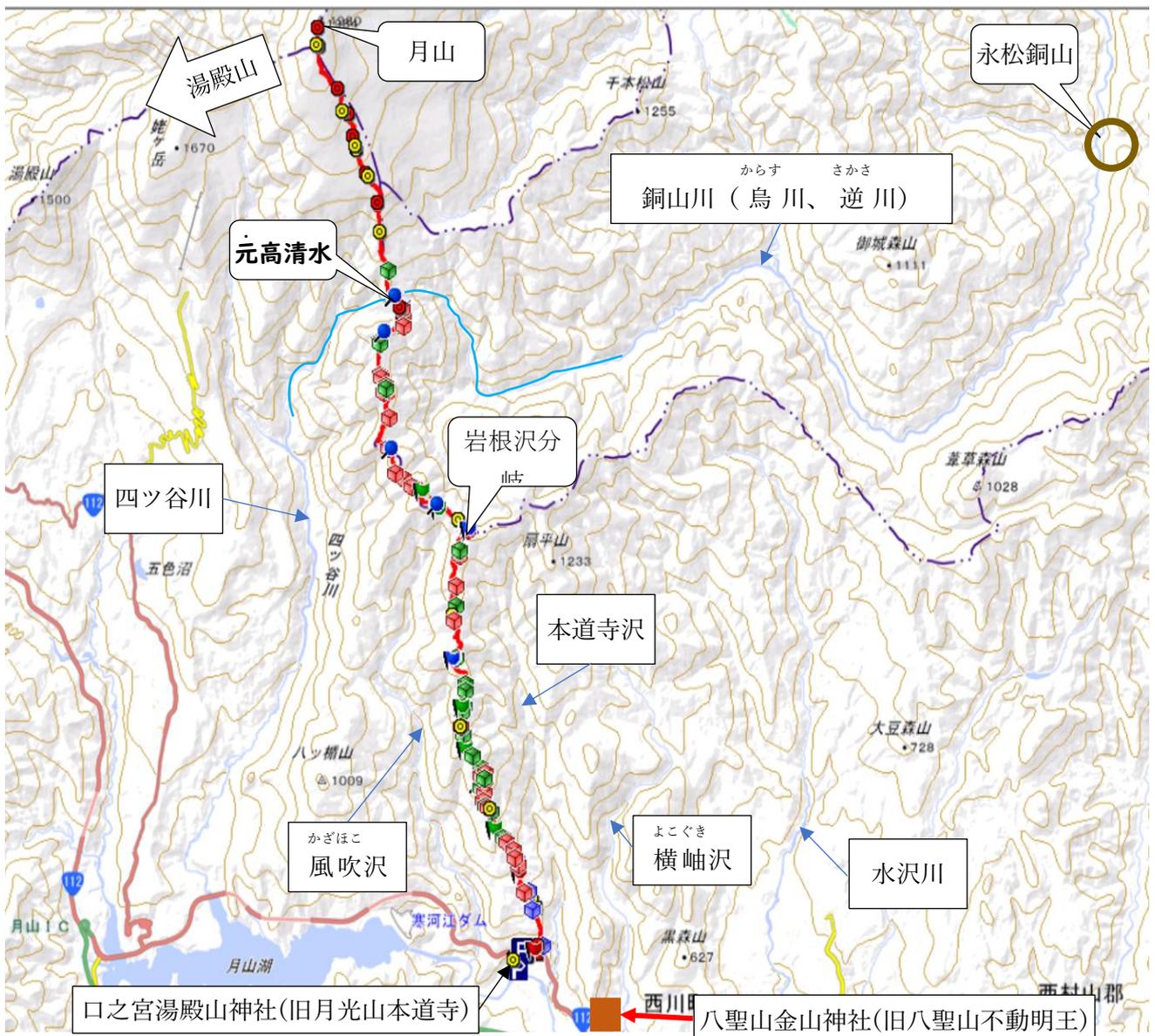


図-2

関係河川		鉱山名 (主産出鉱石)		西川町史に登場する時代	
(西側)	四ツ谷川上流域	赤倉沢鉱山	(銀・鉛)	天明八 (1788) 年	1
(西側)	かざほこ 風吹沢	上流域	船ヶ沢鉛山	(鉛)	文化十一 (1814) 年
		中流域	風吹沢銅山	(金・銀・銅・鉛)	天保八 (1837) 年
(東側)	本道寺沢上流域	わさび 山葵沢鉛山	(鉛)	天保十一 (1840) 年	5
(東側)	からす さかさ 鳥川 (逆川) 上流域	(金・銀・銅)		文化十 (1813) 年	2

本域の歴史的意義付けの厚みを増すために、布施範行は、西川町史等の史料(資料)の閲覧・収集を踏まえた鉱山開発に係る歴史的経緯の掘起こしに努め、本件調査活動に新たな視点を喚起した。(明治元年は1868年)

図(表)-3

この域のイメージをデフォルメ概念図化すると図-4のとおりであり、山師(鉱山関係者)フロンティアロードと見えて来る。

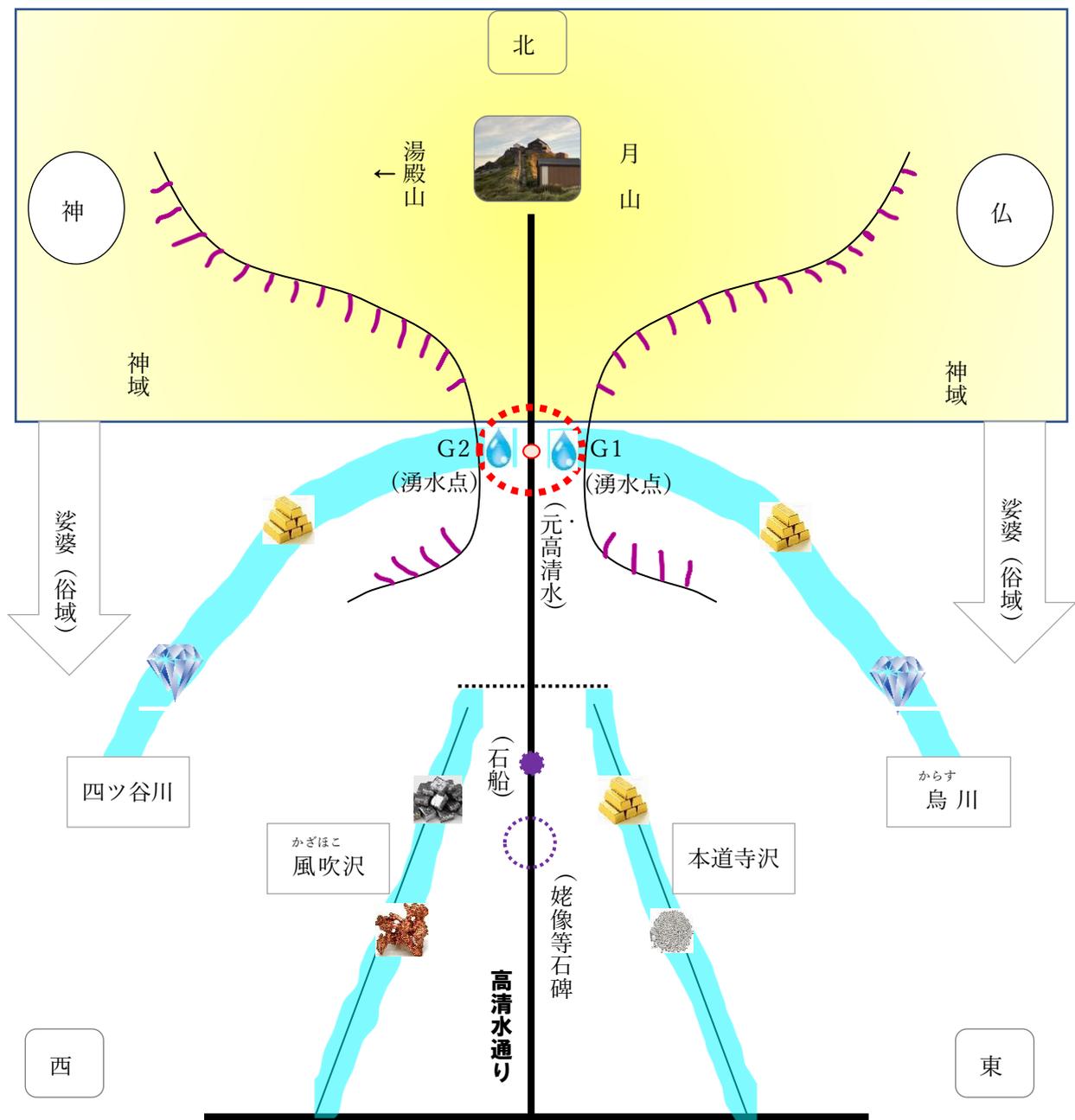


図-4

3. 山師（鉦山師）が尊崇の神仏世界

今野竹蔵著「北條郷鉦山史話」（宮内文化史研究会）に記載の北海道北見北 隆鉦山名の「同盟坑夫取立免状」という冊子（類似・酷似のものは全国各地の山師が携行）に着目する。この「同盟坑夫取立免状」の原点を辿れば、徳川家康が征夷大將軍になったのは、慶長八（1603）年で、それから30年も前の天正元（1573）年、室町幕府が滅びた年に家康が制定した「山の法度五十三ヶ条」と言われている。

その冒頭部に「規定」という項目で図-5のとおりしつらの神仏の名前だけを羅列した一覧が記載されている。私はこれに強い関心を抱いた。部屋の設え・飾り付けのために掛軸風かみ・ぼとけに垂らしたものなのか、あるいは、作業所の天井板とか、土留矢板などに墨書したのか。この神仏を格別に崇めよということだろう。

しかし、この神仏の説明は一言も何も記述されて

いない。そこで大沼が依って立つ意味合いを思慮し、図

（表）-6の(A)-1に抽出し、(A)-2、(B)、(C)を以って整理・概念化を図った。八百万の神々と諸仏を代表化したきれいな対称性・均衡性・調和性が浮び上がる。まさしく、天地人三位一体の融合に基づく所願達成、天下泰平、事物繁栄への道が見えて来る。

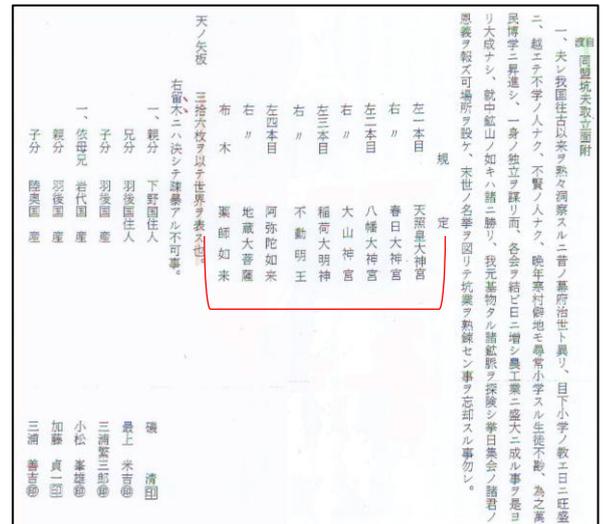


図 - 5

(A) - 1	(A) - 2		
山師必携手帳記載の原本 (以下のように単に羅列)	原本を大沼がグループ化		
	グループ C	グループ B	グループ A
左一本目 天照皇大神宮 右〃 春日大神宮 左二本目 八幡大神宮 右〃 大山神宮 左三本目 稲荷大明神 右〃 不動明王 左四本目 阿弥陀如来 右〃 地藏大菩薩 布木 薬師如来	阿弥陀如来 地藏大菩薩 薬師如来	大山神宮 稲荷大明神 不動明王	天照皇大神宮 春日大神宮 八幡大神宮
			「三社託宣」

(B)								
上記 (A) - 2 の尊格・関係性を大沼が分類、関連付け								
不動明王 [大日如来]								
↑↓			↑↓			↑↓		
薬師如来	地藏大菩薩	阿弥陀如来	稻荷大明神		大山神宮	春日大神宮	天照皇大神宮	八幡大神宮
仏の世界			里の神		山の神	神の世界 (三社託宣)		
(裏に垂迹神)			←————→			(裏に本地仏)		
精神世界			生活密着(経済・物的)の世界			精神世界		

(C)			
本地垂迹関係の代表的例示			
	神宮名	本地仏	垂迹神
三社託宣	八幡大神宮	阿弥陀如来	八幡大菩薩
	天照皇大神宮	大日如来 (地藏大菩薩)	天照皇大神
	春日大神宮	薬師如来	春日大明神

旧本道寺と門前集落の繁栄を支えた高清水通りについて、また、岩根沢の隆盛を支えて来た清川道について、出羽三山（とりわけ月山と湯殿山）参詣という宗教・信仰の世界に焦点を当て考えて来たが、加えて、烏川流域と周辺一帯は鉱脈が走り、鉱山関係者——経営者の山師（鉱山師）、あるいは、労働者の鉱夫・坑夫が行き交う鉱山開発とも強く係っていたことが分った。なお参考だが、身近な処では「岩根沢ものがたり」には、道者相手の烏川行人小屋においては、繁忙期には金堀衆が小屋の運営に手伝った、と記述されている。

当時は、山には八百万の神仏靈魂が沈潜・浮遊・籠っていると観念されており、山にノミを入れること、すなわち、人工的な掘採・掘削・金堀することからの祟り・神罰を強く恐れたことから、ことさら前記神仏への帰依、信仰心が篤かったのではないか。下流域村民や鉱夫・坑夫に対する鉱毒による健康被害の心配がある一方、裏腹に雇用の場が得られるという実利の面があり、時には民衆に対立が生じたという。

文化十一（1814）年に、烏川沿いに設けられた砂金の採取場や本道寺集落親方の処に、鉱山開発中止を求める凡そ 3,000 人が抗議行動で押し掛けたという史実が記録されている。——鈴木勲著「文化年間における本道寺騒動について」等より。

4. 関連図から読み解く

図-7a・7b は新庄市史より拝借したものだが、銅山川（烏川、サカサ川）の源流部（不動滝上流部）まで描いている、手の込んだ描き方の印象を持つ。なお、原図作成の年号は明示されていないが、

水・九十六丁) 前からの現在の景色で、ここから東北の方角、直線距離約 500m 先に、滝があってこの時は水量豊富で轟音が聞こえた、これも見事なものであった。図-8 b は晩秋、少し位置を変えて撮影したもので、水量は減っていたが、しっかりと数段の滝を成している。本滝はもちろん不動滝谷筋(沢)の上方にある。おそらく「三カイ」とはこれを指しているのではないかと直感した。



図-8 a 2023(R5)/7/17(月)
「元高清水」から



図-8 b 2023(R5)/11/9(木)
鉦泉草付きから

三階滝について国土地理院地形図に対応させると図-9 のとおりとなる。



図-9 a

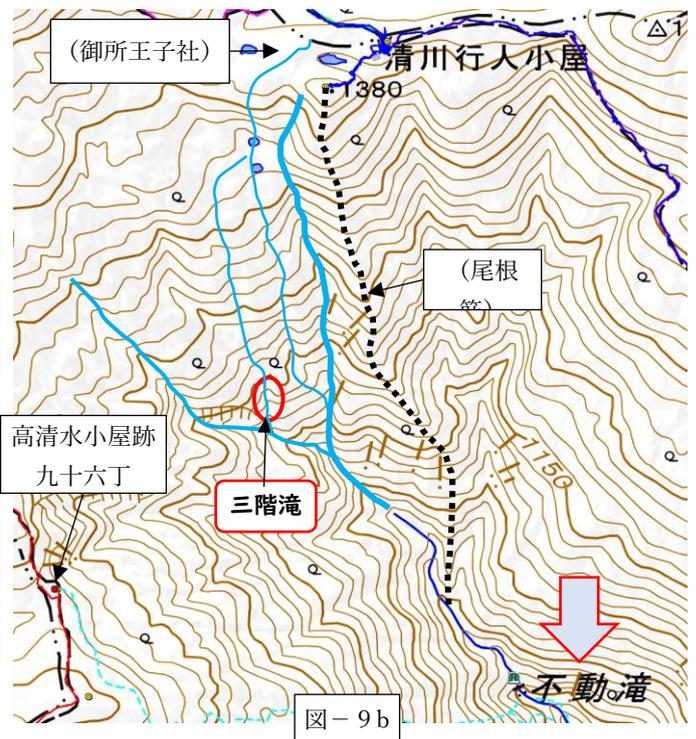


図-9 b

烏川不動滝は別記のとおり信仰上の秘所であったが、三階滝と合わせた周辺域は、鉦山開発者の熱い注目の的になっていたということだろう。

5. 高清水小屋跡地の周辺状況

図-10 エリアにおいてここでは要点のみを取上げる。q1には小尾根を人工的に開削し、しっかり踏み込まれた道型がある、写真は笹竹を刈払って撮影したものの。q2は白いゲル状のもの（鉱石鉱物か？）が沈殿し、q3は赤茶色の水が滞留し金気の味がした。また、q4においては硫黄の臭いがした。

本件エリアには、全国の鉱山関係者から崇敬された全国第一等の鉱山守護の神（昔の本尊は不動明王・金山大明神）を祀った八聖山金山神社（図-11）が鎮座し、金属文化発祥の地とも言われている。前出「北條郷鉱山史話」に次のように一説がある。「・・・坑夫の八聖山祭りは吉野鉱山（南陽市）でも昭和の年代まで行われたという。・・・祭壇には「八聖山金山彦命」の掛軸を、正面に海・山の幸、供物、そして何十本も立てられる燈明台をおく。・・・神前に額づいた坑夫達全員は神官のお祓いを受け、一同揃って祈文を読み上げた。・・・西川町八聖山金山神社への参拝はあとまで続いたという。」

まさに、本件エリアは参詣古道（宗教信仰面・精神性）×鉱山開発（実利と雇用・物質性）の両面を持って来たのだ。

6. その他

烏川域の鉱山開発関係については、井場英雄著「岩根沢ものがり（P31～）」に往時の様子が記録されている。また、高清水通り域については、図-10のとおりの高清水小屋跡（今でいう元高清水）周辺にも鉱山と強く係る痕跡や鉱山関係者も利用したと思われる同小屋から不動滝に至る「秘連古道」（現在、修復作業を継続中）も見付かっている。それら、信仰と鉱山の関連については、本報告書本体の必要な処で取り上げている。



図-10



図-11

(end)